

和泉式部日記の文^{ふみ}

——「のたまはせけると見るもをかしくて」
の解釈を中心に——

川村 裕子

I 問題の始発

和泉式部日記内での文の授受^{ふみ}は、隔たりや伝達方法が緊密感をもつて正確に書かれている。その一つの特徴としては、手はずが狂って文が行き着かない局面に、必ずといっていいほど、その原因・理由が示されることである。ここで取り上げる場面も、従来見過ごされがちであった文の授受^{授受}を中心に見ていくことによって、あらたな解釈が呈示できる個所である。それでは、まず、該当箇所を掲げる。

○かくのみたえずのたまはすれど、おはしますことはかたし。雨風などいたう降り吹く日しもおとづれたまはねば、「人ずくな

なる所の風の音をおほしやらぬなめりかし」と思ひて、暮つ方聞こゆ。

霜がれはわびしかりけり秋風の吹くには萩の音づれもしき(女)と聞こえたれば、かれよりのたまはせける、御文を見れば、「いとおそろしげなる風の音、いかがとあはれになむ。

かれはてわれよりほかに問ふ人もあらしの風をいかが聞くらむ(宮)思ひやりきこゆるこそいみじけれ」とぞある。のたまはせけると見るもをかしくて。所かへたる御物忌にて、忍びたる所におはしますとて、例の車あれば、今はただのたまはせむにしたがひてと思へば、参りぬ。^{参りぬ}

ここで問題となる所は、次の二点である。

①「かれよりのたまはせける、御文を見れば」

②「のたまはせけると見るもをかしくて」

これらについて、諸注釈の見解をまずまとめておく。

現在の代表的な注釈書である小学館ではそれぞれ①「宮からご返事があったが、そのお書きになった御文を見ると」②「いいことをおっしゃると御文を見るにつけても」とある。^注つまり、「いとおそろしげなる風の音」から始まる宮の文は、女の和歌に対する返事であり、「をかし」はその文の内容を指して「いいことをおっしゃる」と解釈する立場である。現在の主な注釈書では①の部分があくまでも「宮からの返事」ということで共通性を持っている(大系、

新釈、ホルプ)。「全講」においても「宮から(返事を)おっしゃってきた、その御手紙を見たところ」とあり、やはり返信と捉えている。

そして、むしろ説の乱立は、②の「のたまはせけるを見るもをかしくて」に集中している。この「をかし」については、次のように諸説が分かれる。

ア、「(式部のことを思って) お便りをくださったのだ」(大系、新釈)とする素直な説

イ、「まあ、おっしゃいましたこと」という宮の歌の内容に關しての「感心しつつ反発」する気持とする説(全講、考注、講談社、ホルプ、譯注と評論)

ウ、「いいことをおっしゃる」(小学館、新編、完訳)とする説

しかし、まず、②のア、イ、ウを考える前に①の宮の返事とする説を再考しなければなるまい。つまり、宮から文が既に出されていて女の歌とすれ違ったのか、それともあくまでも女の歌に対する応え・返信なのか。

実は、注釈書のなかでやや古いものでは、「行き違ひに向うからも下さつた」(昭和完譯)「宮が、たよりを下さらぬのでこちらから手紙をあげたが、それと行きちがへに」(新註)としてある。つま

り女の和歌と行き違ひに宮からも文が発信されていた、と考える立場である。「返信ではない」というところが、現在の注釈書と相違する部分である。^(注四)和泉式部日記内の文の往来を総体的に見れば、後述するように、これは返信ではあり得ない。先に宮から文が出されていたが、女の歌と宮の文とが行き違った、としか考えられないのだ。そもそも発信そのものと捉えながらこの二つの注釈書は「かうまで言つて下さるのかとうれしく思つてゐると」(昭和完譯)「この御手紙が面白く感じられて」(新註)と「をかし」が手紙の内容そのものを指すとした。「昭和完譯」の「かうまで言つて下さるのか」の「かうまで」は文の内容を指しているし、また、「新註」では「面白く」として明白に文の内容を指している。ここから「をかし」が何を意味しているのかという追求に注釈類が走つていったようだ。しかし私見では、「かれよりのたまはせける、御文」^(注五)は紛れもなく宮からの文(返信ではない)と考える。それだからこそ、女の歌と行き違って、宮からの文が送られていた事に対して「のたまはせけると見るもをかしくて」という言句が記されたのだ、と見たい。つまり、「私が出す前に宮様が文を送つてくださったのがうれしくて」となる。単純に自分が歌を送る前に、宮から文が既に送付されていた事に対してのうれしさが「をかし」なのである。自分が誤解して、尋訪もなく、文もなく危倶を抱きつつ歌を出したら、「実は」宮から文が発信されていた。その感動が「をかしくて」といった余韻のある結びとなっているのだ。

「全講」ではこの「をかし」について「『のたまはせける』——おつしやいましたこと——といういい方には、こうしたよろこびとこだわりとの交錯する女心が感じられ、この二重の感情の交錯を、さらに微笑しながらのしんでいるゆとりあるもうひとつ奥の心を『をかしくて』」ににじませているのではなからうか」といった複雑な女心を解析する。そもそも宮の文を「返事」ととることから、具体的に「をかしくて」が何を指し示しているか解らず、女心をそれぞれ微細に探っていく諸説の乱立を導き出したものである。宮の文が既に出されていたことを知っての感動とすれば、文の内容とか女心の複雑な揺れを持ち出さなくても、解釈できるのではないか。ちなみに応永本では「かれよりものたまはせたりける御ふみをみれば」とあり、「かれよりも」となっている。この「も」の参入により「宮からも文があつて」といった意味が付与され、すれ違いが強調される。

さて、諸注釈のなかで常に新見を示す新潮日本古典集成では「をかしくて」に対する頭注で「やはり従前通りに来信があつたので、心が躍つたのである」とし、私見に最も近い。しかし、この「来信」が既に来ていたものを指すのか、それとも歌に対する返信なのか、限られたスペースの注なので明確ではないが、諸注、特に新しい注が文の内実に対する言葉と見ているのに対してあくまでも文が来た事実を「をかしくて」と捉える視点は重要だ。

以下、従来の「をかしくて」の諸説が迷路に入り込んでしまった

部分を「既に出されていた文に対する感動」と見る解釈の根拠をいくつか呈示したい。その際、極めて整然と機能的に描かれている日記内の文の授受をも視野に入れる。特に、伝達方法のずれをいちいち詳細に記すあり方、ずれを記すことによって、より一層深い喜びと心の昂まりを醸し出すといった特異な様相を見ていきたい。

まず、該当本文に置かれている「をかしくて」の意味、宮の文の言葉にある共通性、この個所に二度も出てくる「かれよりのたまはせける、御文」「のたまはせけると見るも」といった「けり」の用法の特徴等を探る。

Ⅱ 「をかしくて」の内実

和泉式部日記においては「をかし」という言葉が頻出する。既に述べて、それが一つの作品世界を形作っている事については指摘がある。このように総体として捉える視点は意味あることだが、そのなかにおいて、如何なる場面設定が為されているかを考えることが、文関係の特異な位相をあぶり出すことになる。文関係の「をかし」という語句はIで示したような例、つまり、文の到来、文の授受、文の往復のなかで頻繁に使用されている。その際、文のなかに書かれている和歌の内容に感じ入るというよりは、文そのものが来た、という事実に対しての驚きの言葉として機能している。文がやって来たことによって心が寄り添い、響き合うことに対する感極まる思いが

「をかし」のなかに込められている。心の揺れや波動、食い違いやずれを克服し、その誤解が解消されるような形で置かれているのだ。当然女側からの語句はその喜悅が溢れている（なお、宮の立場からの「をかし」は三例のみ）。あえて、すれ違い・文の少なさ・女の苦しみといった負の要因が示され、それが超克されて、一気に回復し、女の歡喜を一層盛り上げる様相をあらわす場合に「をかし」が使用される。以下、文関係記述から「をかし」を掬い上げて、その様相を探っていききたい。

例えば、七夕の折、「すぎごとどもする人のもと」から様々な文が送付されてくる。しかし宮からの文がなかなか来ない。その折も折、忘れられたかと女が思い悩んでいる時に宮の和歌が到来する。これに対して「過ぎしたまはさめるはと思ふも、をかしうて」とある。歌の細かい内容というよりは、機を逃さず発信された文が女の心を動かしている。待ち遠しく思っている時に、その期待を裏切らず来たことに対する嬉しさがここには揺曳している。このように、あえて文が僅少であったり来訪がなかったり焦燥や危惧が立ちこめている時に、その不安を一掃するように文の到来が描かれている。いつもは文もなかなか来ないのに、「近うてだにいとおぼつかなくなしたまふに」女が石山に出立するとすぐに宮の文がやって来る（「かくわざとたづねたまへる、をかしうて」）。このように常よりも切迫した文に対する感激が「をかし」にはある。

以上のような単純な疎隔をほめかす文の機能と同時に情趣を分

かち合う文については、様々な論考^(注)があるがそのなかで単に情趣の一致や共感性を陳述するのではなく、前提条件として停滞やすれ違いを述べる形式に注目したい。何らかの障害、感情的な焦燥感や時間的なずれがある場合、あえて、背後に出来た事実を文が乗り超えて胸を打つ「をかし」が記されるのだ。

例えば、女の内面に目を向けると、決まって悩み果てている時に救いの如く文がやって来て「をかし」と言挙げされる。これも、前提条件として負の要因が機能していると言えよう。あえて悩み苦しんでいる女の心に光を投げかけるべく文が出される例である。身の上を思い悩む時に来た「雨のつれづれはいかに」といった文、宮邸入りを控えて「思ひ乱れて臥し」ている時に来た宮の文、それぞれが「をかし」で締め括られている。

もちろん、その場の情趣のみを文に託し、共感を誘う「をかし」もある。「月のいみじう明かき夜」にきた宮の歌「わがごとく」に対して「例よりもをかしきうちに」と記す情況においては、あえて逆境は記されないが、こういったある意味で単純な「をかし」は実は日記内では極端に少ない。むしろ停滞したり澱みがあつたり、何らかの障害やすれ違いが前もって示される場合が圧倒的に多い。そのなかで特筆すべきは、Iの例のように、手違い、すれ違いの場面で、「をかし」が多出していることである。

まず、情趣深い扇の上の文が出てくる場面をとりあげる。ここでは、書かれた宮の文がなかなか女の目に触れない。かなり後になっ

てから宮の文が場面形成のクライマックスに参与しているのだ。始めに、「間遠」である情況に悩み、月の情趣に託して、女が歌「月を見て」を送る。その直後に宮が直接やって来るが、実は既に宮が女に送るべく返事を書いていたことが判る（「御使の取らで参りにければ」）。後から扇に載せられた文を見て女は「なほいとをかしうもおはしけるかな」と感慨を漏らす。ここでは、先に文を書いていたことが、後になって理解される仕組みとなっている。より一層、二人の心の合致が、あえて後からの文によって昂まりを見せる。この「をかし」によって先に書かれていた文が重みを持ち、心の綾が前面に押し出される。わざわざ過去に書かれたというずれや落差をつまびらかにすることによって、現在の響き合う心が強調される。二人の心の動きが文の時差によって描かれ、今の二人が共有している心の波動に厚みが加えられる仕組みとなっているのだ。歌の内容を超えて文による空間・時間が響き合う共感を支えている。これは主に停滞する流れを変える効果、盛り上がる情景をより一層浮上させる効用がある。

例えば扇の場面と同様、クライマックスである手習いの文の始発においてもこの落差は遺憾なく發揮されている。「よろづ思ひつづけ臥し」ている所に宮が来訪するが、女は気付かない。女が手習いをしたためている折に宮からの文がやってきて実は宮が来訪していたことを悟る。「げにあはれなりつる空のけしきを見たまひけると思ふに、をかしうて」女は手習いの文を送る。ここでも、月に動か

されて同じ情趣を共有しようと宮がやって来たことが後になって判る。その文に対して「をかし」と記されているのである。このように、折にふさわしい感動を記す意味だけが、「をかし」にあるわけではない。後になって、実は来訪があった事とか、文があった事が判然とすることによって、趣深い情景をより一層引き立たせるものが文であり、「をかし」であった。

このように、手はずが狂ってしまった事実によって心や空間の隔たりを広げて見せておいて、一気に縮めてみせる効果が文の「をかし」には包含されている。後述するが、Iの記述の相似形とも言える童遅参事件でも「げに、かれよりまづのたまはせけるなめりと見るもをかし」という誤解解消の「をかし」が使われている。来訪がなかったり、文の伝言・発信がなだらかに繋がらなかった場合、後になって誤解と判る仕組みが日記内の文の特徴として存在している。そして、歌の内容や歌の措辞や細かい特徴を指して「をかし」を使用しているのではなく、より総体的な文そのものを指しての把握が「をかし」の特徴と言えよう。

このように見てくるとIの解釈もすれ違いであることが判明する。まず、叙述の前提に「雨風などいたう降り吹く日しもおとづれたまはねば」とあり、通常であつたら示される心やりが書かれな^(注九)い。訪問どころか文もない落胆が女を突き動かし「霜がれ」の歌を送る。しかし、宮の文と行き違っていた事が後で判る。だからこそ「のたまはせけると見るもをかしくて」とより一層の心のはずみが

記されるのであろう。それは、今まで見てきた「をかし」の前後にある叙述形式から類推すれば、妥当性がある。手はずが狂った事態を綴ることによって現時点での喜悅がより一層心に響くような、場面と場面との緊密な連絡が、そこには、形作られているのだ。

Ⅲ 宮の文の特性

それでは、Ⅰの用例を検討すべく、宮の文の特徴、一つの類型のなかに浮かぶ言葉の姿を見ていきたい。

このⅠの段階では、宮邸入り勧誘から宮邸入りに至る過程のなかで、当然ながら、初期の状況とは相違し、宮の文どころか、訪問がたび重なっている。「しばしばおはしまして」、「ありしよりは時々」といった宮の訪れは、女との隔たりが徐々に消え去る様相を印象づける。ここでも、「雨風などいたう降り吹く日も」と荒々しい雨風の日ですら宮の来訪がないあせりと不安が女側からの文発信に繋がっている。その焦燥を解決してくれた宮の文そのものは、「いとおそろしげなる風の音、いかがとあはれになむ」という誠意が示されたものであった。

そもそも作品内の宮の文は短く、鋭いものが多い。それ故、一つ一つの言葉が生きており、あたたかみ、いたわりが余韻をもつて伝わってくる。歌が多く記されていることによって歌の交換のみに目が注がれがちであるが、それらの歌は殆ど文のなかで記されてい

る。しかし、歌の並びは、文というものにくるまれたものであることを忘れてはならない。注意深く宮の文は書かれており、疑惑、不安、悲しみなどに突き動かされている時は長くなるが、総じて女に出される文は極端に短く、特徴的なのは、思いやりに包まれた疑問形で記されることである。当然ながら、文が長いからといってこまやかな心が示されるわけではない。言葉が連なる文であっても、決して密度の高い呼応を生み出すものではない。宮の文は、短いなかに自然に対する情感が醸し出され、女に共鳴を呼びかける趣が横たわっている。日々の風景の断片を忠実に、そして敏感に感じ取って文を送っているのだ。その一つの特性がⅠの宮の文にある「いかが」といった問いかけにある。このいたわりの眼差しをもって女に呼びかける体は宮の文の特徴である。例えば、後朝の文には必ず女の様子を心配し、気遣う「いかが」が書かれる。最初の逢瀬の後は「今のほどもいかが。あやうこそ」とあり、女が涙にくれて手枕の袖に返事ができなかった翌朝にも「今の間いかが」と短い文が送られる。この「いかが」のなかに包摂されているいたわりと思いやりは、折に触れての自然に対しても呼びかけられる。女が悩み臥せている長雨のころにも「雨のつれづれはいかに」と心配し、また、大雨で水が溢れかえっている時にも「ただ今いかが」とあたたかい眼差しで女の様子を聞く。もちろん、女が常でない状態、かぜなどで病に臥している折も「いかががある」と心配してこまやかないたわりを見せる。同じ時空間に共通して心を動かす様相をこれらの

言葉は余すところなく描き出している。月がたいそう美しい時には「いかにぞ。月は見たまふや」と響き合う心を問ひかけ、冬の早朝、霜が白く置けば「たた今のほどはいかが」「いかが見る」と情感溢れる言葉をかける。それに対して一つ一つ女が応えるといった密度の高い呼応は、両者の間のやさしさや心やりを醸し出す。打てば響く心の通い合いは、宮の呼びかけから始まっている。「いかが」といったいたわりはすべて「宮からの文」に記される。さすれば、Iも当然これらの文の類型に当てはまるだろう。雨風の強い日に、「いとおそろしげなる風の音、いかがとあはれになむ」と女の様子を心配して発信された文は、今までの例から推して、思いの丈を込めた「宮から発信された文」と考えられよう。

また、歌の内実から推測しても、宮の文は女の歌を見る前に書かれたと推断できる。なぜなら、女の歌は「秋風の吹くには萩の音づれもしき」のなかに風に吹かれて揺れている萩の葉音と宮の来訪のなさを込めているのである。つまり秋風をどう見るかを既に詠じており、荒々しい風も歌のなかに込められている。それに対して「この恐ろしい風の音をどのように聞いていらつしやいますか」という返事は、間が抜けたものではなからうか。また、宮の歌も「われよりほかに問ふ人も」とあり、「宮のおいでもなくなつて」と詠んだ歌に対する応えとするといかにも図々しく、諸注釈の指摘する如く「かなりいい気にも取れる言葉」（講談社学術文庫）と捉える他ない言句となってしまう。そもそも宮の文にある「いかが」と、宮の

詠にもある「いかが聞くらむ」という思いやりの問ひかけは、女の歌を見ていないからこそ生きてくるのである。これを返歌と捉えたと女の歌を受け取ってから遅まきながら心配をする、といった体の文になってしまう。むしろ、一般的にはこのような形はあるだろう。歌を見て、はぐらかし、重複を示し、あたかも自分も心配していたかに振舞う様式といったものは確かにある。相手の言葉を反復して使いつつ、そらし、ずらしていく文もある。しかしながら、今まで見てきた如く、和泉式部日記という作品内において、宮の文は素直な問ひかけから始まる。「いかが」という語句が含まれていれば、それは必ず宮からの発信であった。また、宮は、鋭敏に文の遅速にこだわっていた。さすれば、宮の文は他の「いかが」の例と同様、先に出されていた、と言えよう。

それが、荒々しい雨風をいたわり、なぐさめ、やさしさの問ひかけを持つ「いかが」であり、歌のなかの「いかが聞くらむ」にもあらわれている。

また、伝達回路の形、宮の音信がこのように齟齬し、なだらかに両者の間に往来ができなかった場合、Iの例の如く「かれよりのたまはせける」「のたまはせけると見るも」と過去形が使用される表現形態が存する。和泉式部日記内、特に宮邸入りまでの段階で、過去の「けり」は両者の手違いを克明にあらわす。宮と女とがそれぞれ何らかの障害を持ったとき、原因・理由が克明につまびらかに

される。例えば、女が寝入って来訪に気付かないとき、疑惑が生じたとき、など両者の行き違いが解決した時点で、くつきりと細かに手違いが述べられる。その折、誤解とも言うべき事実が過去形で記される。視点としては、疑惑が解消し、両者の紡ぎ合いが復調し、心の交流が為された時点で、振り返って記されるのだ。つまり、過去形で、用意周到な伏線が張り巡らされているのである。

例えば、初期の逢瀬が為されない場面を見ていく。宮がせっかく来訪したにもかかわらず、女は寝入っていた。そして宮は女に対する疑惑を抱えたまま戻っていく。翌朝宮は「あけざりし」の歌を送り、女は自分の失態に気付く。その情況においても齟齬の様子が「昨夜おはしましける」「心もなく寝にけるものかな」と宮、女の様子が双方から過去形で記される。それぞれ前日の手違いを開陳することによって、両方から明確に手違いの状態が生き生きと浮かび上がる。視点としては現在（次の日のやりとり）から見て過去の様相を記す体になる。

疑惑のなかで最も後を引いた「人の車」を見たことを綴る個所においても、宮の来訪自体「おはしましたりけるも」と記され、車も「そなたに來たりける人の車」と過去で記される。両者の心の内も「人の來たりけるにこそ」（宮）「人のそらごとを聞こえたりけるにや」（女）と疑惑の周辺が「けり」で囲まれている。

このように、女と宮との行動において回路が壊れかけた時に、それを後から、つまり共通の手違いとして受け取る時に日時設定が必

要となり、時間的落差が必要とされる。これは、あくまでも両者のやりとりのなかで誤解氷解の視点で振り返ることのできる過去なのだ。はつきりした原因を過去形で記すことによって、疑惑の解消した現在が息づいていくような伏線が配置されている。特にこれらは、文や歌の授受に関して、多出している。

女の「ほととぎす」の和歌が届かない場面でも「人々あまたさぶらひけるほど」という宮の目に触れ得ない情況があえて書かれ、「月を見て」の歌を女が送る場面でも「御前に人々して、御物語しておはしますほどなりけり」という障害が描かれる。宮は後で「御使の取らで参りにければ」とあえて言い訳を口に出す。このように、「けり」を先導しているのは、当然ながら「以前のでき事」である。逢瀬の現在から振り返って宮の返歌がなかった理由を過去の事実として再認識する、といった叙述のあり方を示す。このように、届かない文は後の情況、つまり到着した後になってから、過去と現在を対比することによって明確に呈示されるのだ。つまりIにおいて記される「のたまはせける」という二度にわたる過去形は「以前のでき事」以外にはあり得ない。

頻出する誤解やすれ違いや手違いがどのような立場から記されているのか。それが実は日記の緊密な表現と重なり合っているのは言うまでもない。そもそも作品内の「うねるようなやりとり」とされる叙述は緊迫感をはらんでいる。それでなければ、何度も同じ様な、同型のでき事の羅列になってしまう。そのなかに潜んでいる周

到な伏線は、あくまでも現在、相手の情ある思いやりを感じた時点
で振り返って記されている。区切られた時間として一時前の現象が
把握され、再認識され、呈示される。なぜ伝達のよどみを明瞭に記
すか。それは振り返って数時間前のでき事が過去として描かれる
時、現在の思いやりが流れている様相が浮き彫りにされるからだ。
手はずが狂ってしまった事態を判然と綴ることによって、より一層
の重さが表現に加わる。今現在共有している心の波動に重みが加え
られる。

胸を打つ思いやりとやさしさの再確認と共鳴が、境として過去を
描くことにより、いっそう響きわたる。

このような作品内の類型表現を概観すると、Iは返歌ではあり得
ない。「をかし」という感激を記す言葉、「いかが」という宮の
文、そしてすれ違いを囲む「けり」といった過去形、これらは、あ
えて齟齬や食い違いを記し、昂揚する視点を確立する日記の総体か
ら解釈されねばなるまい。

さて、縷々述べてきたが、最後に問題の情況と極めて類型を持っ
た場面を見ていくことにする。それによって、Iの宮詠が返歌では
あり得ないことが判る。

その場面とは、例の童遅参事件の個所である。

○つとめて、例の御文つかはさむとて、「童参りたりや」(宮)
と問はせたまふほどに、女も霜のいと白きにおどろかされて

や、

手枕の袖にも霜はおきてけり今朝うち見れば白妙にして
(女)と聞こえたり。ねたう先ぜられぬるとおぼして、

つま恋ふとおき明かしつる霜なれば(宮)

とのたまはせたる、今ぞ人参りたれば、御気色あしうて問はせ
たれば、「とく参らで、いみじうさいなむめり」とて、取らせ
たればもて行きて、「まだこれより聞こえさせたまはざりける
さきに召しけるを、今まで参らずとてさいなむ」(童)とて、

御文取り出でたり。

「よべの月はいみじかりしものかな」とて、

寝ぬる夜の月を見るやと今朝はしもおきゐて待てど問ふ人も
なし(宮)

げに、かれよりまづのたまひけるなめりと見るもをかし。

女は霜の白さに心動かされ「手枕の袖」の和歌を詠む。それに対
して宮は同時に和歌を送ろうとしていたが、女の歌が先に届いてし
まう。宮は先を越されたことをくやしがり、童をさいなむ。もちろ
ん、この文脈はこれらの齟齬が消滅した時点で描かれている。そ
れが、童の「まだこれより聞こえさせたまはざりけるさきに召しけ
るを」といった言葉によって克明に、丁寧に記される。「本当は歌
(女から)の前に宮から召しがあったのに」という「けり」を駆使
した説明である。そして、女の「げに、かれよりまづのたまひける

なめりと見るもをかし」は行き違いが鮮明になった事に対するうれしさ、心のはずみを描いている。Iの「かれよりのたまはせける、御文」「のたまはせけると見るもをかしくて」と完全に同型を示す。違いは、「まづ」といった言葉だけである。しかし、先に文が出されていたことを示す「のたまひける」はIの「のたまはせける」と同じであり、何よりその手違いを「をかし」と同じ様に記すところは重要であろう。やはり来ていた、宮からも文が出されていたという感激と心の昂まりが場面を覆っている。同じ時を共有し、同じ風情を感じ合うといった共感性が刻印される。以上のような同時性が作品全体に厚みを与えている。間遠になる焦燥にさいなまれつつ、文を出すと、実は、宮からの文が本当は送付されていたのだ、という形によって、二人の間隙が埋まっていく瞬間がそこに息づく。このような形式が同じ様な挿話を繋いでいながら、冗長さを感じさせない要因であろう。

IV 最後に

日記内の文の位相^{ふみ}というのは、緊密な連絡を示す為の手段として浮かび上がってくる。今までも説かれてきた如く、日記内には頻繁に誤解や影の男達が現れ、その度に疑惑が消え、また出来る。不安や焦燥を表示しながら、一挙に絶望を克服する装置として文が置かれている。焼け付くような心痛が宮からの文によって喜びへ転身

する。この不安と喜びの繰り返しは停滞感を醸し出さないような緊密性をもって描かれているのである。絶望から歓喜への転身、喜びから不安の淵に落ちていく様相、これらが畳み掛けるように置かれるところに停滞や冗長さを感じさせない日記の特性がある。隠れていた事実を子細に描くことによって誤解が解かれる。そしてまた、新たな不安が顔を出す。このなかで、いったん出された疑惑は疑惑のまま放置されず、すべてが溶けるように終結する。そして、再び別の猜疑や焦燥の原因が記される。この果てしなく続く繰り返しは、宮邸入りに向けて、実は過不足なく計算され、作品の始発部に示されたような誤解が、同じ形を持ちながら徐々に変質していく。その過程にはたくみな「ずれ」が隠^{（注七）}されている。これらの形は、宮の来訪が為されたまま気付かれない場合や、人の車があり、二人の間に溝が出来るときに置かれている。文といったものが参与し、それまでの手違いが解消され、絶え間のない疑惑が払拭され、一転して叙述が明るさに包まれる。このように女の不安と孤独を、巧みな変奏によって形作っていくところに日記の特性がある。その際、歌の内容そのものの、というよりは隔たりや接近を背後の構図として浮かび上がらせるのは文や伝達のあり方である。事実としては、再三にわたって呈示されるすれ違いや疑惑が、場面と場面の緊密な連絡を示すことによって冗長さや緩慢を感じさせない位相を持っている。歌の交換によって、贈答歌の多様さによって二人の共感性が描かれているのが通説であるが、さすれば、その歌をくるみ、

包んでいた文そのものの動きを解明するのの一つの視点であろう。その時、日記の末尾に置かれた文脈が大きくこの作品を捉える外枠として立ち上がってくる。日記の最後は奇しくもこのように締め括られている。

○宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらじ、書きなしなめり、と本に

宮邸入り以降、北の方と東宮の女御の文のやりとりを指す言辭で日記が終わっているのだ。「宮の上御文書き」は当然ながら、北の方から東宮の女御への手紙を指す。また、「女御殿の御ことば」とあるが、女御は、実際に会話体で登場するわけではない。「里にものしたまふほどにて、御文あり」と文のなかだけで人物が語られる。北の方の恥を慮って退出を促す「夜のまにもわたらせたまへかし」という手紙の言葉のみで女御は存在しているのだ。つまり、「御ことば」とあっても会話で発せられた言葉ではなく、あくまでも手紙の言葉を指しているのだ。歌でもなく、会話でもなく、文に関する言辭で日記の終結が描かれている意味は重い。そもそも「書きなしなめり」というのは、北の方と東宮の女御との文の往来に關して「作り書き」ということわりを開陳しているのだ。ここでは、内容的なものを超えて、文、手紙に関する言辭で、日記全体が終わっているその重みを指摘したい。女にとっては知るべくもない他者の文

についての言辭を「作り書き」と吐露する。ということとは、それ以前の前と宮の文が再び大きな存在となって浮かび上がってこよう。つまり絶えることのない宮と女との他ならぬ文の往来が日記の支柱であったことが、真実味を帯びて迫ってくることになる。北の方と女御の文が「作り書き」ならば宮と女との繰り返される文のやりとりは日記のなかの「真実」として描き出されている、と言えよう。二人の間を繋ぐ文の往来、授受にこそ真実味が付加されているという宣言が終末部から立ち上がってくるのではないか。

はやくも朝日日本古典全書の解説で指摘された「停滞感」という読みは二人のうねるような恋の諸相を描くことに力点がある、という通説によってくつがえされたが、それでもやはり波のように寄せては返す不安や疑惑の数々、そして同じ挿話の繰り返しは無視できない。これは、むしろ「停滞感」を払拭すべく意図的に置かれた障害であり、それを、否定しつつ、心の寄り添いを示す、という形をとっているのではないか。

ある時は、主人公の心理にさざ波が立つように不安や焦燥、憂慮が書かれ、またある時は、嬉しさそのものを倍加させて、生き生きと描いていく方法が計算されている。このやや度を越えた、過剰なまでの距離の遠近と、感情の起伏の描写が日記そのものに動きと躍動感を与えている。二人の距離が可能な限り近づいたり、また隔た

きな流れが貫流する。その際、文は、言葉にならない空間や心の通い合いを示している。筋だけ見れば、まるで同じ挿話の羅列になるところに、伝達のささいな齟齬や誤解が張り巡らされ、そこに文がちりばめられている。「文が来ない」ことを記す段階においても、他人が居て文を見られないといった理由から童の遅参、そして疑惑の発生など、さまざまな原因が与えられている。このような文の細かい表現方法が作品の寄り添っては離れていく情趣を形成していると言えよう。奇しくも日記の最後に記されたように、女と宮との文、その形式を解明することが和泉式部日記の表現を新たに考える端緒になるだろう。

【注】

(注一) 全体的な文の機能に関しては拙稿「蜻蛉日記の文について——平安時代の文の交換を中心に——」(『蜻蛉日記の表現と和歌』所収、笠間書院、平成十年)参照。また物語類の文に関して室城秀之氏『「うつほ物語」の手紙文』『源氏物語とその前後研究と資料』(武蔵野書院、平成九年)がある。

(注二) 本文は、小学館『日本古典文学全集』による。なお、参照した注釈書類を以下に掲げる。

和泉式部日記詳解／昭和完訳和泉式部日記／和泉式部日記新註／増訂和泉式部日記考注／日本古典文学大系／和泉式部日記
 譯注と評論／朝日日本古典全書／新講和泉式部物語／対校和泉

式部日記新釈／講談社学術文庫／新潮日本古典集成／全講和泉式部日記 改訂版／ホルプ日本の文学古典篇／小学館日本古典文学全集／小学館新編日本古典文学全集／小学館完訳日本の古典

(注三) 小学館完訳では、「私の求めていたようなことを」おっしゃってください」とする。

(注四) ただし、「宮の方からも御文があった」とだけで、返信か、すれ違いか、についてさだかでない注釈書もある。詳解等。

(注五) 諸注の本文は、「のたまはせける、御文」として「のたまはせける」と「御文」の間に読点を入れるが、宮からの文が先に出版されていたとすれば、この必要もなくなる。

(注六) 『応永本和泉式部物語』(京都大学国語国文学資料叢書四、臨川書店、昭和五十五年)

(注七) 和泉式部日記の「をかし」については、小野美智子氏『和泉式部日記における「をかし」の考察』(平安文学研究七十六輯、昭和六十一年十二月)、前橋均氏『和泉式部日記の「をかし」をめぐって』(日本語と日本文学七号、昭和六十二年六月)、沢田正子氏『和泉式部日記の「をかし」』(静岡英和女学院短期大学紀要二十九号、平成九年二月)等がある。

(注八) 秋澤互氏『帥宮の美質——『和泉式部日記』の折をめぐって』から、おなじ心へ——(『國學院雑誌』、平成二年一月)

(注九) この段階では、来訪は既に頻繁になっている。それについては拙稿「和泉式部日記の文と夕暮——「待たましも」の歌をめぐる——」(『守屋省吾教授記念論集』(仮称)所収。新典社、

平成十二年三月予定)参照。

(注十) これについては別稿予定。

(注十一) この卷末注記については、大倉比呂志氏『和泉式部日記』卷末注記に関する一覚書(平安文学研究四十八輯、昭和四十七年六月)がある。また、宮邸入り以降の北の方の表現を詳細に読み解いた金井利浩氏「和泉式部日記論への一視角——「人笑へ」の布置をめぐる断想——」(中古文学五十三号、平成六年五月)等の考察がある。